

幕が上がって

今でも時折、あの頃のことを夢に見る。

体験したあのままを寸分違わず映す夢もあるし、それよりもっと酷く投影されることもある。まるであの時のやりきれない気持ちを形にしてみたいな、悪夢。

そのどちらでも自分の足は震えて動かなくて、声が出なくて、情けない、と思う。

演技ができなくなってしまったのは自分なのに、あんなに突きつけられたのに、いつかまた、と期待する心が消えない。それすら消化しきれていないのに、どうして神様ってこんなに残酷なんだろう。

演技を奪って、逃げるように高校の演劇部に入ったかと思えば一年で廃部危機。これ以上何を奪われればいいのだろう。脚本は魂の叫びだった。

もう舞台では声を発することも思うように動くこともできない悔しさと、後悔をぶつける場所。

……違う。

今はもう、違う。テストが終わった後に突如降ってきたひらめきに、心が躍っていた。

脚本を書くこともこの演劇部のことも、きっともう大好きになっていた。だから、その気持ちに真っ直ぐでいよう。

あんなに大好きだった演技を途中で諦めてしまった自分自身へ。そして、真っ直ぐに演技をする姿に、いつからか羨望の眼差しを向けるようになってしまった演劇部の皆へ。梨沙は脚本の執筆を進めた。

青原梨沙から脚本が送られてきたのは、先日のテスト報告会から三日ほど経った頃だった。

田中飛輪はその脚本を眉を顰めて読んでいた。

梨沙の脚本からは、叫び声が聞こえてきた。

私を見て、と。

どうして、と思う。誰かの注目を浴びることは、飛輪にとって苦痛であることとイコールだ。じろじろと失礼な目線を投げかけられ、好き勝手に言葉をぶつけられる行為が、嫌いで嫌いで仕方ない。

だけど、そのセリフひとつひとつから目が離せなかった。飛輪は確信する。見て、と叫ぶその脚本は、これが舞台になったら、観客の目をとらえて離さないだろう、と。

七瀬晴奈は田中飛輪の演技に圧倒されていた。

もともと演技に真摯に向き合う人なのは知っていた。だけど練習の時点で、彼は輝きを放っていた。本当の自分はこういう役者なんだ、自分は何にだってなれるんだ、そう発しているのが伝わってきた。視界の端で、梨沙がそんな田中くんに満足げに笑っていたのを捉える。

次は、晴奈の演じるキャラクターと田中くんの演じるキャラクターが向き合うシーンだ。

緊張感がマックスまで高まったこのシーンでは多くの言葉を語らず、その間や立ち方で意思疎通をする。

頭に入れた立ち位置に立って、顔を上げてまっすぐ田中くンを捉える。

役に入り込み、普段より鋭くなったその目と、目があった。

晴奈はゆっくりと動き出す。

梨沙の意図を、このキャラクターの本心を。探るように、対話するように。

平常心だ、平常心。

三浦海斗はパンにジャムを塗っていた。

昨日のことを思い出していた。

「明日、やり切りましょう！」

昨日は結局通しで何回も練習して、最終下校時刻ギリギリになったことにも気づかず、慌てて出た校舎の外の、梨沙のその言葉で解散した。

いつも通り冷静な人、慌てる人、テンションが上がる人、それぞれだったが晴奈だけは普段と何かが違った。

役に入り込んだのだ、と気づいたのはその日の夜だった。

普段明るい晴奈が演じるのはミステリアスなキャラクター。口数も少なく、その独特な所作が魅力的だ、と海斗は思っていた。

なるほど、だから妙に口数が少なかったのか。心なしか向けられた視線も冷ややかだったような気がする。

自分は、そこまでできない。自分の演じるキャラのことは理解してきたはずだ。だけど、もしかして練習が足りないんじゃないか。よく眠れないまま、当日の朝を迎えてしまった。

なんて、らしくない。

自分なりに一生懸命向き合ってきたと思う。体力も意識して増やすようにしたい、発声の方法も試行錯誤しながら見つけてきた。

ずっと誰かに合わせてきた自分が、初めて熱中できたような。

そんな時間は、嘘じゃないはずだ。

「寝たらやばいな。……コーヒー」

眩きながら、本当は少し興奮状態にあることは、気づかないふりをした。

千明千景はセリフを繰り返して唱えていた。

大丈夫、ちゃんと覚えてる。

何回も何回も練習して、演技そのものに磨きをかけてきたのに、いつも直前でセリフを忘れていないか不安になる。噛まずに言えるか、立ち位置を間違えないか。本番直前の舞台袖で唱えるのがいつもの癖だった。

不安げに揺れる千景の瞳が、一人の姿を捉えた。

「あ、織山くん……」

おそらく最終的な打ち合わせを終えて、持ち場に走る織山風だった。

手には彼がいつも持っているノートを持っていた。どうやら舞台が映えるか、織山くんが細かい文字で書いているのを千景は知っていた。舞台映える衣装を身に纏った自分達と違い、動きやすいように学校指定のジャージを着用していた。

それを見て、大丈夫だ、と思う。

そうだ、梨沙さんが超絶面白い脚本を書いてくれた。田中くんが、完璧な主役になって、七瀬さんがそれを支えて、三浦くんが空気を作ってくれて……。

そうだ、一人じゃない、大丈夫。

マッキーで表紙に書いた、あまり上手くない『演劇部』の文字。

織山風はノートを見返していた。

長くない日数だったけれど、毎回毎回部活が終わるたびに記録をつけてきたノート。最初は機材の使い方すらわからなかったから、学んだこと全部を必死に記録していた。

だんだん梨沙の脚本の癖や役者たちのことが掴めるようになってきて、その度に嬉しくなって、記録はどんどん感想も交えるようになっていた。楽しかった。

継続が苦手な風が唯一なしえたこれも、もう終わってしまうのかもしれない。思いながら、記録をつける。

『やることはやった。まだ終わりませんように。』

綴帳が、上がる。